（４）　義務教育学校の特色「新時代を拓く『令和の日本型教育』の最前線」

義務教育学校は単なる学校形態にとどまらず、「令和の日本型教育」が目指す未来型人材育成を迅速かつ効果的に実現できる最前線だと言えます。非認知能力育成を軸に、学びの連続性や協働性、個別最適な学びなど多角的視点で教育活動を推進するためにも教職員が実践できる実践方法を下記のように考えています。

①　小・中９年間の一貫教育が生む学びの連続性と統一文化の構築

従来は小学校から中学校への進学時に学びや文化の接続が途切れがちでしたが、義務教育学校では９年間を通して学びと文化を「線」として統合できます。小中の文化を融合し統一文化を構築することで、幼少期に育んだ自己肯定感や協働性をさらに伸ばし、中学卒業時には社会で活かせる「羅針盤」として完成させ、未来を切り拓く力を育てます。

ア　学びをつなぐ連続教育（□は「ここにフォーカス」）

幼少期から中学校卒業までの学びを点を結んだ線として捉え、段階的に知識や非認知能力を育てることで成長の連続性を確保します。

○　学年を越えた学習の接続を意識し、授業や行事で継続的に育成する
○　各学年で習得した力を次学年で活かせるよう計画する

イ　小中文化の統合（□は「ここにフォーカス」）

小学校と中学校の異なる文化を融合し、全校で共有する統一文化を作ることで、安心して学べる環境を整えます。

○　校内ルールや価値観を明確化し、学年間で一貫性を持たせる
○　行事や日常活動で統一文化を体感できる機会を設ける

ウ　個の成長を全体で支える環境（□は「ここにフォーカス」）

子ども一人ひとりの特性や学びの進度を全校で把握し、協力して支援することで、安心して挑戦できる学習環境を整えます。

○　学習記録や観察情報を教職員間で共有し、個別支援に活用する
○　学年を越えたチームでのサポート体制を設計し、子どもが挑戦しやすくする

②　教職員の専門性を融合したチーム教育

小学校・中学校の教職員が緊密に連携することで、互いの専門性を最大限に活かしたチーム教育が実現します。小学校教員は発達段階に応じた丁寧な指導を、中学校教員は教科専門性を活かした深い探究学習を共有し､互いに高め合います。これにより、学年・教科の壁を超えた非認知能力の育成が可能となり、未来を切り拓く子どもを育てる最前線の教育現場を形作ります。

ア　小中連携の専門性活用（□は「ここにフォーカス」）

小学校教員の発達理解と中学校教員の教科専門性を融合し、学びの深さと広

がりを最大化します。

○　学年を越えた授業設計会議を定期的に継続して実施する
○　教科指導と発達支援の視点を互いに丁寧に共有する

イ　チームで支える個別最適

複数教員で子ども一人ひとりの学習進度や特性を把握し、最適な学びと成長の支援を丁寧かつ継続的に行います。

○　学習記録や評価情報を教員チーム全体で共有する
○　個別支援プランを教職員全員で協働して作成する

ウ　協働で育む非認知能力

教員間の連携を通じて、協働性・自己管理・挑戦力など非認知能力を授業・教育活動全般で育てます。

○　教職員間で非認知能力の評価視点を統一して確認する
○　協働活動やプロジェクト学習を通して実践的に支援する

③　令和の日本型教育が描く未来型人材を育てる最前線の学びの舞台

義務教育学校は、子ども一人ひとりの個性や学習進度に応じた最適な学びを保障しつつ、異学年交流や教科横断型プロジェクトを通して協働性を育む望ましい教育環境です。非認知能力育成を教育の核として、子どもたちが未来を切り拓く力を着実に身につける舞台を提供し、教職員が一丸となって次世代教育の最前線を力強く牽引する挑戦の場として展開されます。

ア　一人ひとりの特性に応じた個別最適な学びの実現

個々の学習進度や特性に応じて目標設定や教材を柔軟に調整し、主体的に学ぶ力を最大限引き出します。

○　学習進度や理解度を日々観察し、個別課題や教材を柔軟に調整する
○　子ども自身に振り返りの機会を与え、自己評価を通して次の目標を明確化する

イ　異学年交流と教科横断で育む協働的学びの促進

異学年や教科を超えたプロジェクト学習で、対話や役割分担を通じ協働力や課題解決力をさらに高めます。

○　異学年チームで課題解決型プロジェクトを行い、役割分担や対話力を養う
○　教科横断学習で多角的な視点を提供し、協働で課題を深める経験を積ませる

ウ　未来を切り拓く非認知能力の育成

好奇心や粘り強さ、自己管理力などの非認知能力を学習の中で育み、挑戦や試行錯誤を通して成長を促します。

○　好奇心を刺激する問いかけや探究活動で、自発的に考える力を育てる
○　挑戦や失敗を受容し、粘り強く取り組む姿勢や自己管理力を養う指導を行う